12　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　〈金沢大〉　二〇一六年度出題

　地球からひとつ、またひとつと言語が消えていく。今日、これを「言語死」と呼ぶ社会言語学者は少なくない。日本語使用者にとってアイヌ語は何より身近な絶滅危惧種のひとつである。日本語がアイヌ語を絶滅の危機へと追いこんだ。

　地球上、言語に死が訪れるその訪れ方はかならずしも一様ではない。日本列島北方域における和人とアイヌとの接触・交渉を遡れば、有史以前まで達するだろう。べつに隣人の言語に精通しあっていたということではないとしても、隣接言語の存在（や気配）について、一円のひとりひとりが認識を共有し合っているという状態を考えるならば、である。エミシ（「愛瀰詩＝蝦夷」）にはエミシ、シャモ（アイヌ語の「隣人」sisamの変形）にはシャモの言語があるということは、おのおのが隣人をそう呼び合っているかぎり、いわば常識だったはずである。

　もっとも、本州（島）から北へと渡った者の多くが交易にたずさわる商人層であったことを考えると、そのバイリンガル化は部分的で、一時的なものにとどまった可能性が高い。反対に、和人商人への経済的な依存を深めたアイヌ系先住民族のバイリンガル化は段階的・不可逆的であったにちがいない。松前藩がアイヌによる日本語習得（とくに読み書きのそれ）をタブー視したのは、アイヌの同化が一方的な⑴サクシュのさまたげになるのを危ぶんだせいだろう。この政策はアイヌ系バイリンガルの圧倒的な存在感を物語ると同時に、アイヌ系バイリンガルに対抗できる和人側の力量をめるだけの下地が、その当時には存在したことをもあらわしている。

　ともあれ、北海道開拓使設置（一八六九）の時点で、かりに「地」におけるアイヌ語の危機が深刻化していたとしても、それはアイヌ自身のアイヌ語離れによるというより、むしろ江戸期の「蝦夷地」における、それこそノサイドと呼ぶ以外にないような和人による虐待・、そして疫病の流行がアイヌ語人口の激減をもたらした結果と捉えるべきだろう。

　ところが、明治日本による一方的な統治とともに事態は急変する。和人の組織的入植と、南下するロシアや外国人宣教師の脅威からの保護の名を借りた同化政策は、アイヌ語の存続を可能にする環境そのものに致命的な打撃をくわえた。もちろん、同化政策だけがアイヌ語の威信失墜に手を貸したわけではない。土着の言語と外来の公用語とが共存・並存している地域は、現在でもフィリピン、アンデス高地、パラグアイなど、少なくない。旧「蝦夷地」（＝北海道）のバイリンガル状況をアイヌ語の生存にとってきわめて過酷な状況へと劣化させた何よりも大きな原因は、⑵リクゾクとして内地各地から押し寄せた入植者がアイヌ語に対して何ら興味や関心を示さなかったことにある。それまでであれば、アイヌ語を覚えることは和人にとっても⑶ユカイで有益なことだったはずだ。ところが、明治に入ると、英国人宣教師ン・バチェラーのようにアイヌ語習得に熱意を示した宣教師がそれだけで危険分子かと怪しまれるほど、アイヌ語に対する関心は、言うなれば物好きのレベルへと後退した。アイヌの存在を目障り・耳障りに感じることはあっても、アイヌ系の労働力に依存しようとなど思いつきもしない入植者は、和人だけで自足・完結する傾向にあり、歴史的に言語接触の地であった「蝦夷地」は、いつのまにかアイヌにだけバイリンガルであることを求めるというＡ不均衡な言語空間と化したのである。そのうち、リンガルであることに何ら不自由を覚えない和人の専横を横目に見ながら、アイヌはバイリンガルである自分に誇りをいだけなくなっていった。「旧土人特設学校」の教員にアイヌ系のバイリンガルが登用されるケースがないわけではなかった。しかし、それとて一時的・便宜的なものにすぎず、アイヌ系の教師は、児童に対して誇り高いバイリンガルたれと促すよりも、アイヌ語から日本語への⑷ジンソクな切り替えを強いる使命を帯びた。

いかにその民族語に愛着を持っていたとしても、バイリンガルの話し手によ

って話される民族語の方が、その言語しか使わない話し手によって話される

民族語よりも、危機におちいる度合が大きい。

　フランスの社会言語学者アジェージュは、モノリンガル話者のマジョリティ化が、バイリンガル話者のマイノリティ化を助長する傾向をとらえて、こう書く。この環境のなかで、のアイヌ系バイリンガルとしてその名を後世に残すことになる知里幸恵が、かりにそうしたアイヌ系バイリンガルのなかで恵まれたエリートの部類に属したとすれば、それは彼女がアイヌの口頭伝承を日本語に置き換えられるだけの言語能力を備えていたからというよりも、そのことに誇りを持て、と金田一京助から力強く背中をおされた、アイヌのなかでも別格的存在だったからである。この誇りをかりにすべてのアイヌの児童に植えつけることができたなら、そのときは知里幸恵ばかりではなく、アイヌ文化を背景に持つ児童のすべてが知里幸恵程度には幸福でありえただろう。しかし、知里幸恵はバイリンガルであることの誇りと喜びを享受できる特権に浴しながら、しかし、ウタリ（＝同胞）とともにこれを分かち合うに十分なだけの人生の残り時間が与えられなかった。その代わり、『アイヌ神謡集』（一九二三）という小さな一冊が、誰というのでもない、Ｂアイヌ系バイリンガル全員の墓標のような書として私たちの手に残されることになった。

　「北海道旧土人保護法」の制定（一八九九）までを「前近代」として年代区分することを提唱した歴史家の河野本道は、それまでの「半異風文化」が完全に近代日本文化に制圧されていく保護法以降を「近現代」と呼んで「前近代」とは切り分け、この新時代の文化状況を次のように記している。

おおよそあるいは全く近代国家の国民化し、基本的な生活様式が和風化したアイヌ系の者が、過去の文化を局面的に無意識に持ち続けたり、あるいは、それを局面的にこだわりを持って半ば意識的に保持したり、あるいは、それをある種の必要性（研究者への対応のためなど）から意識的に維持し続けたりするといった段階〔……〕

　河野は、アイヌ系先住民族が同化するプロセ性を意識しながら、可能なかぎり幅広くアイヌの文化的アイデンティティの様態をくくろうとしている。アイヌにとって、「近現代」とは、意識的であれ無意識であれ、もはや「局面的」にしかアイヌ文化の継承者ではありえない時代だった。知里幸恵や、その祖母モナシノウク、あるいは伯母マツのように「ある種の必要性」からアイヌ伝承を「意識的に維持」できたアイヌ人が一方の極にあったかと思えば、「無意識」レベルで、しかも「局面的」にしかアイヌ文化と向き合えず、アイヌ語の効用を実感できない無数のアイヌたちが反対の極を占める。後者にとって、アイヌ文化とはそれこそ気の迷いや気の病程度でしかなくなる。モナシノウクや金成マツや知里幸恵らは、金田一京助によって、アイヌ文化を保持することを精神障害ではなく、民族的知性の健全さの証とみなされた例外的な近代人だったのである。

　ここでは、二〇世紀初頭、知里幸恵の書き残したものを読み返しながら、アイヌ（もしくは日本列島北方域の和人）にとってバイリンガル性とは何であったか、またそれが何でありうるのかを考えてみたい。

　いまなおアイヌは滅んでなどいない。『アイヌ神謡集』の「序」のなかで、「愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる為に用ひた多くの言語、言ひ古し、残し伝へた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、びゆく弱きものと共に消失せてしまふのでせうか」（二ページ）と自分に問いながら、知里幸恵は、あやうく言語文化の滅びと民族の滅びとを混同しそうになったが、生きたアイヌたちは、いまなお私たちのまわりで日常を営んでいるし、ごく普通の日本人と見えた人間が、ある日突然、「アイヌ」を自称する場面を私たちはいつどこででも予想できる。むしろ、Ｃひとよりも確実に危機的状況にあるのはアイヌ語の方だ。アイヌ語の現状はほとんど標本としてのそれで、これを生きた言語としてあやつり、この言葉を用いることの誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、それこそ局地的・断片的である。

　もちろん、絶滅の危機にした言語がふたたびするケースは皆無ではない。イスラエルでライ語に起きたような奇跡がアイヌ語に訪れないとはかぎらない。言語再生の実現には茨の道が待ち受けているだろう。しかし、忘れないようにしよう。バイリンガル状況が「言語死」の前段階であるというアジェージュの説が多くの場合に本当だとして、Ｄ言語再生が実現する土壌もまた、同じバイリンガリズムを足がかりとしないかぎり、開かれてはこないのである。アイヌ語の未来は、バイリンガリズムの未来である。

　ここでの考察は、べつにアイヌ語の再生を正面きって目標に⑸カカげるものではない。しかし、アイヌ語の影響力が低下しつつあった時代に、その低下を食い止めようとする数々の努力が、その未来を保証されないまま潰されていった過程を考えることは、それとは別の未来がアイヌ語にありえた可能性に広く目を向け直すことに他ならない。いったんえた希望、そして未来だからといって、それらは実現不可能性が一度で決定的に証明された希望や未来などではない。

（西 成彦『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院、二〇一四年、七～十二ページ「バイリンガルな白昼夢」一部改変の上、引用）

（注１）　通訳。通訳を行う者。

（注２）　ある人種や民族を虐待、抹殺したり、その生活条件を剝奪したりする行為。

（注３）　一八七七年に来日したイギリスの宣教師、アイヌ研究家。著書にはアイヌ英和辞典『蝦和英三対辞書』など多数。

（注４）　言語を一つのみ習得している人、状態。

（注５）　片足を引きずって歩くように、つりあいのとれない状態のまま進行する性質。

（注６）　ヘブライ語は、ユダヤ人の離散にともなって話されなくなり、ユダヤ教徒によって文字言語として継承されてきたが、一九世紀後半からパレスチナのユダヤ人の口語として復活し、現在イスラエルの公用語となっている。

問１　傍線部⑴～⑸の片仮名を漢字に書き改めよ。

問２　傍線部Ａ「不均衡な言語空間」とは具体的にどういう空間か。本文に即して説明せよ。

問３　『アイヌ神謡集』が、傍線部Ｂ「アイヌ系バイリンガル全員の墓標のような書」と説明がなされているのはなぜか、本文中の記述を用いながら説明せよ。

問４　傍線部Ｃ「ひとよりも確実に危機的状況にあるのはアイヌ語の方だ」について、その理由を九十字以上、百十字以内で説明せよ。

◎問５　傍線部Ｄ「言語再生が実現する土壌もまた、同じバイリンガリズムを足がかりとしないかぎり、開かれてはこないのである」とあるが、そのように考えられる理由を、アジェージュの説に言及しながら説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝搾取　⑵＝陸続　⑶＝愉快　⑷＝迅速　⑸＝掲

問２　和人の組織的入植と同化政策が行われ、Ａ和人はアイヌの労働力に依存せず自足・完結していたのでＢアイヌ語に関心を示さず、Ｃ和人に経済的に依存するＤアイヌのみが日本語を習得する必要に迫られたという言語空間。

Ｂ・Ｄの内容が必須。

Ａ＝３／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝３

問３　知里幸恵のようにＡアイヌ系バイリンガルとしての誇りと喜びを享受できる可能性があったにもかかわらず、Ｂアイヌ語の効用を実感できず、強制されるがまま日本語話者となり、Ｃバイリンガルとしての生き方を失ったことを『アイヌ神謡集』は示しているから。

Ｃがなければ全体０。理由説明でなければ減点２。

Ａ＝４／Ｂ＝３／Ｃ＝３

問４　Ａアイヌはいまなお日常を営み、アイヌ民族としての自覚は受け継がれているが、Ｂアイヌ語を実生活で使用し、Ｃその言語に誇りや喜びを感じ分かち合う機会は局地的・断片的にしか存在しないため、Ｄアイヌ語の伝承ができなくなっているから。（１０８字）

Ａ・Ｄがなければ全体０。理由説明でなければ減点２。

Ａ＝３／Ｂ＝２／Ｃ＝３／Ｄ＝２

問５　Ａモノリンガルよりバイリンガル話者の民族語が滅びる可能性が高いというアジェージュの説を逆に考えると、Ｂ絶滅に瀕した言語を日常語として蘇生するには、Ｃ再度公用語と民族語とのバイリンガル話者を生み出すことが有効であると考えられるから。

　　［別解］Ａアジェージュの論じるように、外来語とのバイリンガル状況は民族語の滅亡の危機を高めるが、Ｃバイリンガル話者によって使用され続けているかぎり、Ｂその言語は伝承されていき、契機があればまた広まる可能性が残るから。

Ａ・Ｂ・Ｃの内容が必須。理由説明でなければ減点２。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４